

# ひびきジャーナル



編集／発行 特定非営利活動法人 純正律音楽研究会

〒106-0031東京都港区西麻布2-9-2 Tel 03-3407-3726 Fax 03-3797-5640 e-mail:info@pure-music.ne.jp

-対談-  
玉木宏樹の  
この人と響き合う

『ストリング』編集長  
青木日出男さん

青木日出男（あおきひでお）  
一九五五年生まれ。一九八一年  
にレッスンの友社入社、一九八  
七年創刊の弦楽専門誌「ストリ  
ング」編集を経て、一九九四年  
より編集長に就任、現在に至る。  
高校時代からトランペットを始  
め、吹奏楽・オーケストラ活動  
を続けてきた。

レッスンの友社の月刊誌「ストリング」にて玉木宏樹による「音階と音律 その歴史と謎」を一九九九年三月号より三十一回に渡り好評連載、そこで提唱した音階練習をまとめた『革命的音階練習』を二〇〇六年二月に同社より出版しました。二〇〇六年四月号からは新連載「革命的音楽論」をスタート。玉木宏樹の言いたい放題、自由奔放、刺激にあふれ、常識を覆そうとする音楽論を、ときに困った顔をしながらも根気よく支持してくださる、そんな青木編集長をひびきジャーナルが逆取材。編集長の立場から見える音楽界、その中での純正律の存在はいかなるものか、お話を伺いました。

## 革命的音階練習大反響

玉木 『革命的音階練習』を出版してくださって、ありがとうございます。評判はいかがですか。

青木 とても売れ行きが良く、増刷ももうすぐですよ。

玉木 それはとてもうれいいですね。読者からの反応はどうでしょう。

青木 革命的音階練習の最も斬新な点、どの調も同じ音から始めるということについては、皆さんとても興味を持っていらっしやると思います。一方で、少

玉木宏樹（たまきひろき）  
一九四三年生まれ、神戸市出身。  
東京芸術大学ヴァイオリン科卒。  
純正律音楽研究会代表。作曲  
家・ヴァイオリニスト。

純正律で音楽革命が巻き起こる！

し難いという声もあります。頭を使うのが苦手だ、というような感想も耳にします。

玉木 なるほど。そういう感想は多いだろうなあ。

青木 私もトランペットで革命的音階練習をやっていますが、やはり自分も楽譜どおりに吹くことで精一杯。半拍ずらす、などになると難しい。楽譜を見ないととなるともうお手上げです。

玉木 なるべくなら見ないように、ということですか。あれは回答のようなものですか。

青木 やることがハードなので、あつという間にウォーミングアップになります。

玉木 その言葉はうれしいです。普段練習しなくても、あの練習で大丈夫です。ラクなことを長くやっても仕方がないのです。

限られた時間の中で、集中して練習する、その方法として、革命的音階練習を編み出しました。青木 管楽器にもとてもいいと思います。管楽器の仲間にも勧めています。

「革命的」は続く

玉木 また新たな本も出したいですね。今春からの新連載「革命的音階論」が単行本になるといいな、と思っています。

青木 このシリーズの方が読者

にわかりやすい、入りやすいかもしれませんね。それからまた音律と音階の話に戻るのもいいかもしれません。「革命的」という言葉がキーワードになっています。インパクトがあるし、いろんなテーマが出てきます。玉木 革命的音階論では、例えば次（左枠内）のような項目について書いていこうと思っております。読者の方からも早速、期待や疑問など様々な反応を寄せられています。

### 革命的音階論のテーマ

- ・ 音楽を難しく考えるのはやめよう
- ・ 音楽を聴くのも演奏するのも「明快」を旨に
- ・ ヴァイオリンは決して難しくない
- ・ 演奏家はサービスマンと心得よ
- ・ 「芸術」かどうかを決めるのは聴衆である
- ・ 作曲家は台本作家と心得よ
- ・ 日本の音楽史教育は間違っている
- ・ ドイツは音楽文化の後進国だった
- ・ 楽典はデタラメの集積である
- ・ 楽典は「謎解き」として楽しもう
- ・ 演奏家は即興演奏をすべきである
- ・ 対位法やソナタ形式は即興演奏のデタラメさを枠づける役割だった
- ・ メロディを歌うということにテクニクはあるのか

青木 私もこれからの展開が楽しみです。

間違いだらけの音楽史

玉木 新連載でも紹介した『音楽演奏の社会史』（大崎滋生著・東京書籍）は本当におもしろいです。

青木 そうですか。まだ読んでいませんが、それは是非読みたいですね。

玉木 著者は桐朋学園大学音楽学部教授大崎滋生氏です。彼の主張を少し紹介します（次頁枠内）。私がいつも言っているようなことなんですけど、この本はそれを裏打ちするとともに、もっとすごいことを教えてくれます。これから間違いだらけの音楽史を告発することも、書いていこうと思います。



大崎滋生著『音楽演奏の社会史』より

- ・バロック時代なんてなかった
- ・進歩史観の音楽史は間違っている
- ・楽譜は料理のレシピ
- ・バッハが音楽の父のはずがない
- ・ピアノは女生徒のもの
- ・モーツァルト、ハイドンは、バッハを全く知らなかった
- ・ベートーヴェンのハンマーピアノは長い間演奏されたなかった
- ・テレマンが忘れられたのはピアノで弾ける曲がなかったから
- ・音楽学校の教育レパートリーがスタンダードとなっていた

心をえぐるテクニック

玉木 革命的音楽論の読者からお手紙がきて「メロディを弾くのにテクニックが必要か」ということに興味があるとのことでした。

青木 私も興味があります。

玉木 人の心を打つメロディの弾き方はテクニックなんです。ここではこう奏く、という方法が決まっています。これが私の遺言になると思います。

青木 それはたいへん知りたいです。初めて玉木先生が弾かれるのを聴いたとき、たいへん失礼ながら、なんでこんなうまい

んだらうと思いました。

玉木 私はそんなにうまくありませんよ。

青木 五十歳過ぎると多くの人が衰えていきますよね。しかし玉木さんの音を聴くと、つやっぽい。どうして?と思います。

私にとつては驚異的でした。

玉木 それは「技」があるからです。例えば、演説の技術、人に自分の話を聴かせる方法というのがありますよね。音楽もそれと同じことです。聴いている人の心をえぐる技、説得させる奏き方というのがありません。簡単なことなのにみんな知らない。

普通の演奏家達はアウフタクトを軽んじます。そして、クラシックを聴く人は、心をえぐられたいと思って聴きにきているわけでもありません。クラシック演奏家は聴衆の心をえぐりたいと思っていない。でも、そうしないと駄目です。お金を払って、聴きにきている人の心をえぐる、それがプロのあるべき姿じゃないですか。

青木 それができていない人が多すぎる。そういう演奏に出会うと、みんな今まで自分は何を聴いて来たんだろう、と思うでしょうね。今の多くの演奏家はほとんど心をえぐるところまでいかないですね。無難にこなそう、という程度です。

玉木 コンクール用の課題曲のように弾いています。そういうのではおもしろくない。有名な女性ヴァイオリニストの演奏をテレビで見ると、とても苦しそうな顔をして奏いている。そして音程は悪い。見ている息苦しくなる。思わずチャンネルをかえてしまいます。あんな姿でよく人前で奏くなあとと思います。

一生懸命奏いている、その姿がいいという人もいるからいいのかな。

青木 ギトリスは心をえぐるような演奏をしていると思います。が、いかがでしょうか。

玉木 確かにギトリスは「えぐり屋」だと思います。でもあのえぐり方は僕は反対です。僕とギトリスがえぐりの技術合戦やったらおもしろいと思うな。僕はね、彼が参ったというと思いますよ。自信があります。彼は瞬間芸なんです。それで人の心をえぐれると思っっている。でも、そんなことさえ、みんなしないのです。

青木 彼はまだサーブスしようとしているからいいですね。

玉木 そうですね。純正律も同じことです。人の心をえぐる、みんなに美しいと思っしてほしい、その最終兵器が純正律です。純正律の調律をコンピューターで楽しんでも、それは音響学のことではあるけれど、音楽と関係ありません。純正律だから必ずきれいだ、というのは大いなる勘違いです。その点では私も誤解も広めた分もあるかもしれませ



いるか、わかっていない。それが問題です。プロの方に聞いても、わかってない場合が多すぎる。

玉木 何にも考えていないですよね。「ピタゴラスだ」って答える人はいない。

青木 「ピタゴラス音律」という言葉を知らないです。

玉木 弦楽奏者にピタゴラス音律について説明するとみんな、初めて知った！という顔をする。それまでは、三平方の定理の人という程度の知識です。純正律、平均律、ピタゴラス音律、せめてこの3つくらいは意識しておいてほしい。キルンベルガー、ヴェルクマイスター云々まで知っていろとは言わないから。

青木 この3つは音楽教育で必須にすべきだと思います。純正律だって、学校音楽で習う機会がなかったですから。

### 純正律は原理主義

玉木 私が現在取り組んでいる純正律運動は音楽に対する原理運動だと思っています。原理運動というと、テロなどネガティブなイメージと結び付いて、旗色が悪いから、純正律が原理主

義だというときつと受け入れられない。でもそれはそうじゃないと思うんです。原理主義はキリスト教でいうとルターです。

ローマ教会が腐敗したとき、聖書に戻れと説いた、それが原理主義です。純正律も、音楽界にとつては原理主義です。

青木 原理主義という言葉はいろいろあるので抵抗がありますね。それに、玉木先生が訴えたことは、純正律だけでしょうか。平均律だって否定しているわけではないし、様々な音律があります。「純正律」という言葉だけでは足りないのではないのでしょうか。

玉木 そうですね。純正律を原理にしていろいろなことを見ていく、ということが言いたいのです。純正律の見方からいうと、ピタゴラスはこう、平均律はこう、ということなんです。他の音律を否定する、という考え方ではありません。

青木 純正律をより広めていくためには、そこを誤解しないように理解してもらうことが必要だと思います。

「ストリング」の歴史と展望  
玉木 レッソンの友社について教えてください。

青木 『レッスンの友』は昭和三八年十月二八日に創刊されました。現在の会長（河村昭三氏）が、ピアノ教師から、自分と祖母さんたちとのコミュニケーション、生徒とのコミュニケーションを図る中で、みんなが悩むことを雑誌にすることから始めました。

玉木 今でもレッスン料、お礼など、みんな悩んでいますね。他の人になかなか聞けないことですし。

青木 会長の理念としては、会長は「ポリフォニー」を重視する。それが原点であり、現在に至ります。演奏会批評はしない。紹介はしても批評はしない、という、それが理念です。多少、感想程度は書きますけれど、いかにも批評はしません。それが当社の二大理念だと私は思っています。私もこの理念には賛同しています。

玉木 青木さんがレッスンの友社に入学したきっかけは？  
青木 音楽と出版に関わりたいと思っていたところ、知人から



レッスンの友社  
『ストリング』

紹介されて入社しました。「ストリング」は会長の意向で創刊しました。私はトランペットをやっていますので、もちろん「ストリング」に関わりたいたいと思いました。

玉木 弦楽奏者以外の方も「ストリング」を読んでいますか。

青木 主な読者は、弦楽奏者、音楽愛好家です。管楽奏者や指揮者のインタビューを掲載することはありますが、管楽器の人などはほとんど読んでいないと思います。

玉木 それは残念。もっと広げたいですね。

青木 そうですね。そしてやがては、オーケストラの雑誌を作りたいです。ここ数年来あたためている希望です。

玉木 それはすばらしい夢ですね。ぜひ実現して下さい。これを読んだ誰かが先に立ち上げてしまうかもしれないから、早めにね（笑）。

天国的純正律音楽入門  
第十六回

大崎滋生著

『音楽演奏の社会史』に

ついて

純正律音楽研究会代表  
作曲家・ヴァイオリン奏者

玉木宏樹



前回、大崎滋生氏の著作『オーケストラの社会史』から、標準ピッチの問題を取り上げた。もちろんこの著作のおもしろさは、そんな細かいことだけではない。他にも現代の我々には想像もつかない当時の音楽家達の生活規範や就職状況等々の涙ぐましい話しに満ちあふれ、同じ人間同士のドタバタぶりがヒシヒシと伝わってくる。とても残念なのは、この本が大分

前に絶版になっていて、とても手に入りにくいことだ。ネットオークションにも出ているかもしれないが、神田の音楽専門古書店「古賀書店」(東京都千代田区神田神保町2-5・電話03-3261-1239)には先日一冊置いてあったので、ここにお願ひするのでもいいかもしれない。

さて今回はその『オーケストラの社会史』から、他の話を紹介するつもりではいたが、その後の時間経過の中で、少し劇的な展開があったので、そのご報告をした。『オーケストラの社会史』を読了してから、いろいろとその内容を分析しつつあった時、

渋谷のヤマハで大崎滋生著『音楽演奏の社会史』を発見し、すぐに購入、読み出したところ、あまりの新鮮な驚きと共感で、今までに経験のない読書体験となった。『オーケストラの社会史』はどちらかというと資料の豊富な歴史データ書であり、それはそれでたいへん

な興奮を呼ぶ内容ではあるのだが、『音楽演奏の社会史』は、書き方が全く違う。ここでももちろん、豊富な資料をもとに、大崎氏は、鋭く現代の音楽認識のありようを大批判し、作品のありようや作曲家の内実に対し、変な言い方だがいわば実存主義的なアプローチをもとに、今のステロタイプな音楽史を物の見事にひっくり返してしまふ。こういう考えはもちろん私の専売特許だと思っていたが、どっこい大崎氏は豊富なデータをもとにされているのでまるで説得力が違う。

いい意味でショックを受けた私だが、大崎氏が今でも桐朋学園大学の教授をなさっているのならと思いい、短大でのゲスト講師として純正律講座に出かけた際、上尾教授にもしチャンスがあったら紹介してもらえないだろうかと相談し、私自身の純正律関係の資料とCB Sソニーで出した純正律CDの音源等を上尾教授に託したところ、

しばらくしてメールで、「ただいま、同封されていたCDを聞かせていただいたところですよ。正直に申し上げて、驚愕しました。このようなものがかつて耳にしたことはございません。スタジオ中はエコーだらけになる、という体験もしてみたいものです。なんとか想像してみようと、凄じ聴覚情景が浮かんできます。」というような、たいへん好意的な内容のお返事をいただいた。近々お会いできる機会もありそうで、とてもうれしく思っている。

さて、大崎氏の言及していることは、たいへん重要なことであり、本誌の巻頭対談においても、その主張を紹介している(P3枠内「大崎滋生著『音楽演奏の社会史』より」)が、これには私も諸手をあげて賛同したい。もちろん本文ではその主張を裏づける豊富な資料が列記されている。もっといろいろなテーマはあるけれど、これだけでもすごく刺激的だと思う。他の

著作も含め、改めて詳しくご紹介  
したい。

# 放文社書店NHK店で純正律音楽CD販売中！

NHK出版グループ

株式会社放文社

代表取締役社長 吉澤幸夫さん

株式会社放文社  
代表取締役社長  
吉澤幸夫さん

純正律は心癒される本当の音楽  
たくさんの人に知ってほしい

東京都渋谷区にあるNHK放送局内の放文社書店NHK店にて現在、玉木宏樹の純正律音楽CDが販売されています。純正律音楽の普及に多々ご協力を頂いている放文社の吉澤幸夫社長のお話を伺いました。

Q 放文社書店NHK店はどのようなお店ですか。

NHK局内にあるため、お客様は当然、NHKの職員の方、関係者の方が中心です。芸能関係、音楽関係の方々も多く来店されます。テレビでお馴染のクラシックの作曲家の先生がしばしばご来店され、音楽の書籍についてアドバイスをされることもあり、音楽に関する書籍はとても充実しています。おそらく、純正律についても出会えませんが、理解されるような、違いのわかる、打てば響くような方がたくさんいらっしゃると思います。また店員にもギターを演奏したり、音楽が好きな人間が多いんですよ。

Q 吉澤社長が純正律と出会われたのはどのようなきっかけでしたか。

数年前に玉木さんがTBSラ

ジオに出演されて、純正律について話しているのをたまたま聞きました。まず、玉木さんの話がおもしろかった。そして、純正律がいかなるものか、たいへんわかりやすかった。この慌ただしい世の中で、人間の心に響くものというのがすぐに理解できました。そこで是非お会いしたいと思いい、連絡をとると、玉木さんがズタ袋を下げてやって来てくれました。自分もおもしろい人間のつもりですが、これはまたおもしろい人だなあと思いました。そこで文化創作出版から出した著書『音の後進国日本』をみせてくれました、それをきっかけに書籍やCDを放文社でも販売することになりました。

Q 吉澤社長にとって純正律とはどのようなものでしょうか。

私自身は以前、楽器メーカーで営業をしたり、楽器卸業などに携わっていました。今となっ

では音楽については聴くのみ立場ですが、色々聴いてきた中で、いいものかどうかはわかるつもりです。

出会ったときから現在にいたるまで、折にふれて純正律音楽を聴いています。休日の午後、ゆったりと時間をとりながら聴いていると、とても心が癒されます。その音楽の質の高さにふれ、街の雑音が耳障りに感じ、その質により人間の精神も変わる事を自覚しました。純正律こそ、本当の音楽だと思っています。

純正律音楽は今後、いろいろな媒体に出ることで、もっと普及させていくべきだと思います。「純正律」という言葉をそもそも知らない人がまだまだ多い。まずはそれを知ってもらう、そして聴いてもらえるといいと思っています。

充実した音楽関係の書籍  
の棚に並ぶ純正律のCD

# ♪ 人を癒す仕事 人を癒す音楽 ♪

濁りのない、透き通った和音をもとにした純正律音楽は、聴く人にやすらぎを与えます。そんな純正律音楽のフアンの中には、人を癒すことを目的とした仕事に携わっている方が多くいらっしゃいます。そんな方々の取り組みをご紹介します。純正律音楽についてのご意見などお伺いします。

「体の中の声に従って正直に生きよう」

## 塩澤薬局 代表 薬剤師 平部利奈さん

※写真右、薬剤師石田裕子さん（左）とともに

漢方薬局としての取り組み  
塩澤薬局は漢方薬専門の調剤薬局です。基本方針は漢方中心の東洋医学で、西洋新薬の知識も取り入れ、できる限り客観的な立場から、日々の食事及び生活指導を含めた総合的なアドバイスを心掛けています。料理研究家の中村きよみ先生をお招きして、薬膳教室も開いています。病気ではない程の体調不良も治療中の体も理に叶ったおいしいごはんを食べると元気になってきます。漢方薬を入れたものも入れないものも薬膳といえます。その原則を学ぶものです。かつては大学病院にいましたが、そこで西洋医学の治療方法に疑問を持ち、東洋医学の方に可能性があるのではないかと思いい、今の仕事に就きました。病気になってしまふ、異常が現れる、その前に、体の本来持つ治療力などを引き出すこと、バランスの良い状態にあるのが健康であり、そういう状態に戻すお

手伝いをすることができ、それが東洋医学ならではの良さだと思います。

純正律との出会い

純正律については、「割烹うさの」の田口さん（前純正律音楽研究会幹事）からお話を聞いたことがありましたが、昨年十二月のコンサートに行った時に初めて知りました。聴いていて心地良く、薬局でも流しています。純正律はうるさくないです。ピアノはBGMに流すとだんだん疲れてくる感じがあります。

趣味でアイリッシュハープをやっているのですが、純正律音楽のCD『春へのあこがれ』を聴くと、ミーントーンは普通の音と違うので、最初は変な感じがすると思いましたが、やはり聴いていて気持ちいいです。ミーントーンのハープをもぜひ弾いてみたいと思っています。

漢方薬などが並び  
純正律音楽が流れる店内

今後の展望

今の時代、西洋よりも東洋、自然に近いものが見直されてきています。無理矢理の部分が多くなり、医学でも音楽でも、体の中の声に従って正直に生きよう、という動きがあると思います。みんなが自然なものを利用できる世の中になる。この薬局は、そういうときに、それに付いて正しい知識、正しい情報を提供できる場でありたいと思います。もともと日本人がもっていた知恵が忘れられている、それを思い出す、そして定着して自然なものになる、そんな世の中になると思います。そういう意味では東洋医学と純正律は通じるものがあるなと思います。純正律が本来の音なのであり、特殊なものとしてではなく、自然に広まるといいなと思います。

# 寄稿 ショパンと純正律

村上真太郎 (純正律音楽研究会正会員)

はじめまして。「MIDIによる調律法聴きくらべのページ」というホームページを運営している村上と申します。ここでは「ショパンと純正律」の組み合わせについてご紹介したいと思います。とは申しませんが基本的にこの方法は、既に次の著書で知られているものです。

高橋彰彦著

『複合純正音律ピアノのすすめ

— ショパンこそ純正音律で』

ISBN:4276124042

音楽之友社 (一九九二年出版)

高橋彰彦著

『複合純正音律の華・ノクターン— ショパンこそ純正音律で』

ISBN:4276124034

音楽之友社 (一九九六年出版)

しかし現在、プロのピアニストがこの「複合純正音律」で実際の演奏会やレコーディングを行ったという話は、残念ながらほとんどみつきりません。理由は色々考えられると思いますが、強いてひとつ挙げるとすると、歴史的根拠という点で専門家の十分な支持を得られなかった、ということも一因なのではないかと思われれます。

しかしここで、ひとつ面白いことを見つけましたので、これをご紹介しておかなければならないと思いました。それは、前記の著書で提案されている「複合純正音律」と、「キルンベルガー第1」の調律法が、実はほとんど同じ：ということです。キルンベルガー (Johann Philipp

Kirnberger, 1721-1783) の調律法ならば、当時の音楽理論や時代背景を考慮してショパンが実際に使用していた可能性が十分にありえます。

ここで「キルンベルガー第1」について簡単にご説明しておきますと、まず白鍵はハ長調の主要3和音を純正に合わせて決めます。「F-A-C」「C-E-G」「G-H-D」が純正です。黒鍵は「D-Es-A-S-Es-B-F」「H-F-is」の5度をそれぞれ純正に取って決めます。

現在、「キルンベルガーの調律法」といえば何も言わなくても、「第3」のことを指すほどで、「第1」の存在はほとんど無視されているような状況です。理由は言うまでもなく、この調律法が純正律であるために、純正律の欠点として毎度おなじみのあの「D-Aのヴォルフ」があるためです。このような欠点の



ある調律でショパンの曲を演奏できるなどと言われても、にわかには信じがたいというのが普通の反応でしょう。

でも、もし天才ショパンがこの純正律の特徴を熟知した上で作曲していたとしたら？

なんと、次に挙げるショパンの曲では、確かにD-Aのヴォルフがうまく避けられており、まったく問題にならないのです。

純正律の一種であるキルンベルガー第1で演奏可能なショパン作品の例

・エチュード op.25

(「エオリアン・ハーブ」・

「蝶々」・「木枯らし」・「大

洋」等)

- ・ワルツ第1番 変ホ長調
- ・op.18 「華麗なる大円舞曲」
- ・ワルツ第6番 変ニ長調
- ・op.64-1 「小犬のワルツ」
- ・ワルツ第7番 嬰ハ短調
- ・op.64-2
- ・ポロネーズ第6番変イ長調
- ・op.53 「英雄」
- ・ノクターン第1番変口短調
- ・op.9-1
- ・ノクターン第2番変ホ長調
- ・op.9-2
- ・即興曲 第4番 嬰ハ短調
- ・op.66 「幻想即興曲」等

他の作曲家と比較して頂ければ、これは偶然と呼ぶにはあまりにも多すぎるということがわかると思われれます。いずれも#や♭の多い曲ですので、「一見」純正調らしさ」はありませんが、実際にキルンベルガー第1で演奏してみると、臨時記号とともに非常に効果的に純正な和声を用いられていることがわかりま

す。

もっとも、ショパンの曲はこのようなキルンベルガー第1でうまく演奏できる曲ばかりではなく、たとえばポロネーズ第3番「軍隊」などはD・Aが頻出するのでNGです。プレリユードop.28も、やはり無理があります。これらの楽曲にはキルンベルガー第2、第3、そしてラモー (Jean Philippe Rameau 1683 - 1764) の調律法などを候補に挙げることで、ショパンが当時の複数の調律法をうまく使いこなしていた可能性が浮かび上がります。

ショパンが持っていた調律法についての知識は、現代の我々の想像を超えるものであったことはおそらく間違いないでしょう。ショパンのメロディの源泉は、純正律をはじめとする色々な調律法の豊かな響きに支えられていた、のかもしれないね。

(了)

## ホームページ紹介 MIDIによる 調律法聴きくらべのページ

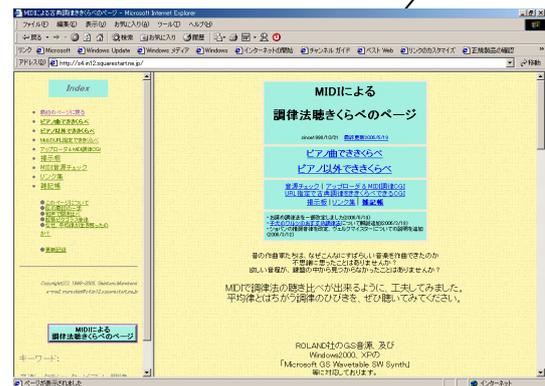
<http://s4.in12.squarestart.ne.jp/>

MIDI で調律法の聴きくらべができる村上さんのホームページ。ショパンの曲をキルンベルガー第1で聴くこともできます。

■調律法ききくらべのページの意図するところ ■  
「クラシック音楽の演奏について、しばしばその音程と調律法の問題について議論されます。しかし私には、その多くが理論的で頭でっかちな議論に終始してしまい、「それが、人のところに、どうきこえるか」という視

点が欠けてしまっていることが多いように思われます。いうまでもなく、人の心は理論で説明できるようなものではありません。その心に訴えかける為の音楽にとって、理論は必ずしも万能では無いでしょう。

このページでは、まず第一に、さまざまな調律法をきいてみていただき、そしてそれらを自分自身がどう感じたか、という事に注目していただきたいと思えます。」  
(ホームページより抜粋)



## 平均律の普及の 思想的背景について (5)

純正律音楽研究会理事

黒木明彌

平均律はいつ広まったのか？十八世紀末までには広まっていた、という説と、そうではなく十九世紀末である、という説がある。私は前回までにこのふたつの説を紹介し、それぞれその論拠を分析してみた。その結果、ふたつの説ともそれなりに説得的であるが、共に決定的な論拠に欠けるということが分かった。確たる証拠も無いまま、それぞれがそれぞれの主張を繰り返している、というのが実情である。

しかし私はあくまでも十九世紀末を取ることにする。フランスを中心とする十九世紀末のヨーロッパを専門領域とする研究者として、平均律はこの時代に広まったと考えるほうが妥当であるように思えるからだ。あるいは、平均律の普及という現象がこの時代のヨーロッパの精神に見事に符合している、とも言えよう。直接的な証拠は無いものの、状況証拠は確実にこの時代と平均律を結びつけているように思えるのだ。以下、そのいくつかの状況証拠について解説してみたいと思う。

一つ目として挙げられるのは、絶対音高である。絶対音高とは、ラ $\equiv$ 四四〇ヘルツと定められた音高の基準値であり、誰もに等しく開かれていてという意味で普遍的な基準である。この普遍的という発想はヨーロッパに起源を持つと言って良い。

だが、ヨーロッパにおいてこれが定まったのは十九世紀に入ってからのものであり、比較的最近のことにはすぎない。音の高さに関する単なる絶対的な基準ということであれば、実は、ヨーロッパに先んじて中国と日本には古くから存在していたという。しかし、それは宮廷楽団が公式な儀式の場で演奏する時の音合わせに使われたのであり、万人に開かれた普遍的な基準とは言いがたい。言い換えれば、それは一部の特権階級のためのものであった。対して、ヨーロッパの十九世紀とは、芸術が特権階級からより多くの人々に開かれていき、「公共」が出現した時代であったことを思い起こしておこう。

音高は、かつてのヨーロッパではミュージシャンごとにバラバラであった。それだと合奏の時困るので、基準を設けようという動きが生じる。十七世紀

くらいからのことだ。こうしてそれぞれの劇場がそれぞれに基準となる音高を定めていくこととなるのだが、それでも劇場ごとに音高はバラバラだった。そのような中、どこへ行っても同じ音の高さで演奏ができるような絶対的な基準を設定しようという人々が現れた。十九世紀初頭のフランスである。ということはもちろん、単位の「普遍化」を目指した大革命後のフランス政府の思惑と重なっている、ということに注意したい。サレットというパリのコンスルヴァトワールというパリのコンセルヴァトワールの学長がその立役者であった。一八一二年、彼は当時のパリで用いられていた音高を調査・比較し、フランス国内で統一した音高を用いるように布告する。一八五八年には、デプレ、リサジュという二人の物理学者、オベ、サレット自身、ベルリオズ、アレヴィ、マイヤベーア、ロッシーニ、A・トマという7人の音楽家と更にはムリエと

いう將軍（コンセルヴァトワールと軍楽隊の結びつきの強さを示している事実である）からなる委員会が組織され、フランス国内の音高をラ

四〇ヘルツという現在  
の数字に落ち着いたのである。  
ところで、平均律の最大の  
利点というのは、それが世界  
的に統一された共通の尺度で  
ある点だと言つて良い。つま  
り平均律が前提となつていれ  
ば、どこへ行つても、そして  
誰とでも、更には初めて会つ  
た人であっても、共演が容易  
なのである。古典調律を使つ  
ている時代では、つまり各々  
がバラバラの調律を使つてい  
るのであれば、共演はまず互  
いの調律を合わせるところか  
ら始めなくてはならない。  
そして平均律がこのような  
普遍的な尺度として機能する  
のであれば、当然、絶対音高  
の設定が不可欠になつてくる  
ことはすぐにでも理解できよ  
う。その絶対音高の設定が十  
九世紀であることを考えれば、  
平均律の普及も十九世紀に入

ってから本格化したと考えるのが自然なことではある。  
連続エッセイ 外科医のうたた寝 第十五話

## サロマ湖一〇〇キロマラソン

純正律音楽研究会理事 福田六花（医学博士 作曲家）

マラソンをはじめて十年余り、ハーフマラソンがフルマラソンになり、駅伝、トライアスロン、アドヴェンチャーレースと徐々にエスカレートし、六月二十五日、遂にウルトラマラソンに出場してきました。ウルトラマラソンとは一〇〇キロを走るマラソンであり、フルマラソン（四二・一九五キロ）の二・五倍近い距離を走る信じられないような大会です。日本には十大会以上のウルトラマラソンがありますが、僕が選んだのは北海道のサロマ湖一〇〇キロマラソン。サロマ湖周囲の美しい風景と、比較的フラットで走りやすいコースが人気の大会です。

前日に現地入りすると準備を済ませて午後九時には眠ります。スタートは午前五時で起床は午前三時、どんぶり三杯の朝食を食べると送迎バスに乗ってスタートの湧別町体育館に向かいます。荷物を預けてストレッチを済ませ午前五時、二八〇〇人のランナーが一斉にスタート。僕の目標タイムは十一時間以内です。

スタートしたものの全体にのんびりしたムード。それもその筈なにしろゴールは一〇〇キロ先であり、最初から急いでもどうなるものではありません。朝もやに煙る草原の中に続く一本の道を二八〇〇人が黙々と走ります。静かで爽やかでとても熱いレースのはじまりです。一時間もすると朝もやが晴れて、眩しい初夏の太陽がじりじりと照り始め、カラダも温まり調子も上がってきました。通常のフルマラソン（四二・一九五キロ）では僕は一キロを四分三〇秒前後で走りますが、一〇〇キロなので一キロを六分と設定して走り続けます。四〇キロで不意にサロマ湖が姿を現し、そこから先七〇キロまでは左手に雄大なサロマ湖、右手には美しい原生林と云う贅沢な風景のコースが続きます。普段眺めて暮らしている河口湖とは比較にならない、どこまでも広がるサロマ湖の青さに心を奪われるのですが、五〇キロ過ぎから徐々にづらくなってきました。もう五時間以上ひたすら走りつばなし、足、腰、肩、全身のあらゆるところがミシミシと悲鳴をあげはじめ、一キロあたり六分三〇秒〜七分にペースダウン。それでもなんとか耐え凌ぎ、五キロごとのエイドステーションでスポーツドリンク、バナナ、梅干し、おにぎり、アンパンなど色々貰って、頭から何度も水を振りひたすら走り続けました。

八〇キロからワツカ原生花園に入ると気持ちがあがってきました。残りの距離が少なくなった余裕もさることながら、今度は右手にオホーツク海、左手にサロマ湖、そして周囲の美しい原生林に癒されて走り続け、一〇時間五六分でゴールの北見市常呂町スポーツセンターに走り込みました。

走り終わって大きな感動と達成感に包まれましたが、「来年も走るか？」と聞かれても今はなんと答えられません。

このところ、純正律的音楽フィールドにおけるめざましいCDがいくつか出ているので、それを紹介したい。

## CHOIR BOYS『CHOIR BOYS』

ucj4763107 (ユニバーサル UCCS-9013)

合唱王国のイギリスから、3人のボーイソプラノによるめざましいCDが出た。少年コーラスといえば、少し前のイギリスの「リベラ」は、最初はとても良かったけど、最近は立て続けにCDを出し過ぎたか、少し疲れ気味のところへ、その御株を奪うかのように登場したアルバム。といっても、3人の扱いは、自然なハモリ以外、ストレートで透明なソロ中心。フォーレの「レクイエム」の天国的な終曲、「ダニーボーイ」、リベラも歌っているメンデルスゾーンの「我が祈りを聞きたまえ」と、ここまで聴き進んで最後の最後、朗々たるアレグリの「ミゼレーゼ」で大人と一緒に圧巻のコーラスに到達する。CHOIR BOYSは今でも話題になりつつあるが、必ず有名になるのは間違いないだろう。

## バッハ『マタイ受難曲』

Naxos8.557617-19

Naxos は新譜でもたいてい1枚 1000 円前後のうれしいシリーズだが、このCDは3枚組でなんと 2490 円。絶対にお薦めのお買い得である。私はストリング詩の連載の中で3大B (ベートーベン・バッハ・ブラームス) は嫌いだと書きまくってヒンシュクを買っている。自分でも長い間、バッハは演奏すると面白いが、聴くとシンドイと思い込んでいた。その典型がこの「マタイ受難曲」、昔聴いた私の印象では、暗く、濁って、大袈裟、でしたが、この Naxos 盤を聴いて、そういう印象は完全に覆り、逆にこんなに美しい曲を書くバッハを再認識しました。というよりも長年バッハを誤解していたのは、私の若い頃はまだ古楽演奏なんてなく、バッハ、ヘンデル、モーツァルト、みんな平均律でもないようなひどいオーケストラと、やたらビブラートをかけるコーラスで、濁った大音響の演奏を聴かされていたからだった。この盤の演奏は、ドレスデンとケルンの合唱団とオーケストラとソリスト達により見事な古楽音律で、とても天国的にハモっている。そしてレチタティーヴォのバックのオルガン (たぶんポジティブオルガン) がとても良い調律で美しい。私のお薦めのバッハだ。

『ルネサンス期ドイツの宗教&世俗音楽集』

**Naxos8.557627**

アメリカの古楽グループによる見事にハモリきった純正律の世界。特にリコーダーアンサンブルやショームとホルンのアンサンブルはハモリ切って、すごい倍音が聴こえてくる。

『T R I O』ヴェーセントリオ

**KORNA MUSIC MPKM017**

ニッケルハッパというスウェーデン民俗弦楽器を中心としたワールドミュージック系のハモリ。弦楽器の可能性を再認識させてくれる。ワールドミュージックのコーナーでぜひ見つけていただきたい。

06年03月22日(水)

「デイ愛甲原」(神奈川県伊勢原市)  
出演|| 玉木宏樹(ヴァイオリン)

純正律音楽の効果に注目された特定非営利活動法人MOMO「デイ愛甲原」施設長の川上道子さんのお招きにより、純正律の講演と演奏に伺いました。老人介護関係の方などがお集まりになり、純正律の効用について真剣に聞いて下さいました。住民が中心となった自分らしく暮らすためのまちづくりにも、純正律をぜひ活用して頂きたいと思えます。

06年04月22日(土)

感動空間 VOL・98

「純正律・春へのあこがれ」  
癒しのコンサート

ウイークリーサロン(横浜市青葉区)  
主催 グローウイング企画  
出演|| 玉木宏樹(ヴァイオリン) 高木真理子(アイリッシュハーブ)

亀岡久美子さん、南條敦子さんのお二人による、地域の皆さんが、本格的な音楽を身近に楽しめる素敵なコンサート。満席の会場で、モーツアルトやオリジナル曲など、たっぷりお楽しみいただきました。この企画は、

十年に渡って続けられ、今年の六月でなんと百回の開催を達成されました。今後は、また新たなスタイルで企画を、新たな展開が楽しみです。

06年04月29日(土)

富士吉田市立看護専門学校

「春和祭」

出演|| 玉木宏樹(ヴァイオリン) 福田六花(歌・キーボード)

「健康第一★生き生き長生き」をテーマとして開催された学校の祭。地域の皆さん、そして学生の皆さん、多くの方にお集まり頂いた中で、福田六花氏による純正律の効果についてのプレゼンテーション、玉木宏樹による純正律の説明、「悠久のケルト」「カイト」などの演奏、福田氏と玉木のジョイントで「都祈野」「ホワイトプレイヤ」などを演奏しました。この他にも、健康に関するクイズラリー、ヘルシーな食事のレストランなど看護専門学校らしい催し物で、学生の皆さんの熱意が伝わってくる学校祭でした。

06年05月27日(土)

「サウンドオブジョイ第4回チャリティコンサート」

OAGホール(東京都港区)

主催 ちいさいおうち\*1・東京川ゾンタクラブ\*2

\*1|| NPO法人ファミリーハウスの1施設として二〇〇二年二月に港区内に開所。国立がんセンター中央病院等、病院に長期入院、通院する病気の子ども達と家族を全国各地から迎えている。

\*2|| 米国で1919年に設立された国際ゾンタは世界65カ国に三万四千人の会員を有し、女性の地位向上を目指す奉仕団体。東京3ゾンタクラブは二〇〇四年四月に設立、特に国内で支援を必要とする子供達への支援を活動の中心としている。

出演|| 玉木宏樹(ヴァイオリン) 高木真理子(ハーブ)

前半はミーントーンハーブで、モーツアルトやオリジナルの純正律作品で、純正律音説明を兼ねての演奏。後半はグランドハーブで「春の海」「花のワルツ」など、お馴染みの曲で盛り上がり

ました。あいにくの雨模様でしたが、会場はたくさんのお客さんで熱気にあふれていました。  
06年06月9



日(金)

「心ときめく素敵な夜を スイミングしたくなるような新しいヴァイオリンの世界へ」

出演|| 玉木宏樹(ヴァイオリン) 小松真知子(ピアノ) 福田六花(ピアノ等)

会員制のリゾートホテルでのディナーショウ。玉木宏樹による純正律の説明、演奏とともに、吉本系お笑いヴァイオリン、福田六花氏による食と健康の話、歌、小松真知子さんのピアノとともにタンゴ、アンコールではお客さん

の歌声とともに「花」など、充実の内容で、皆さんに楽しいひとときを過ごしていただきました。 ※今後のイベント予定は別紙を参照下さい。

